

PHD LETTER

62

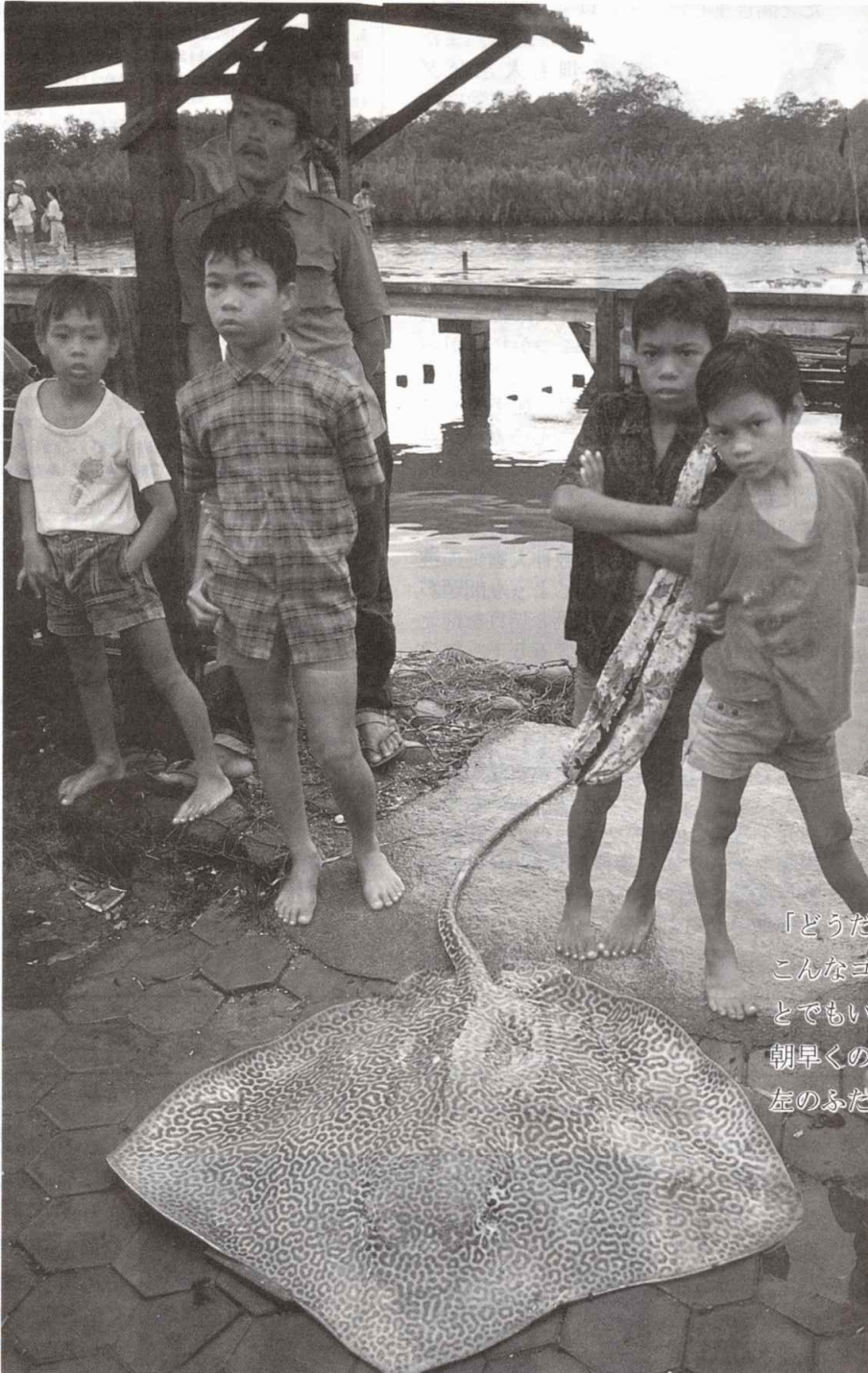
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1997・3

- タイ・スタディツアーレポート…………… 3 P
- 15期生紹介…………… 5 P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
 編集人：草地 賢一
 住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
 元町アーバンライフ202
 TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867
 定価：100円



「どうだい あんたのところにや
 こんなゴツい魚はいないだろ」
 とでもいいたげな子どもたち。
 朝早くの魚市場、
 左のふたりはちょっと眠そう。

インドネシア西スマトラ州
 アイルバンギス

草の根の人々を訪ねて Report from Asia and South Pacific

フィリピン、ヌエバエシーハ州ガバルドンは過去5回にわたってPHDの地域組織化研修の実習地です。この村から二人目の研修生としてミノ・トレドさんを迎えました。私も何度かここを訪ねています。

フィリピンは年間十数回大きな台風が襲来します。96年7月ガバルドンは台風に襲われました。ここは台風のために大きな被害に苦しみます。山の木はかなり前に伐採されており、その後の植林は充分なされていません。村を流れる川は今回も荒れました。治山治水の不備は村に住む多くの人に苦痛を強めます。

去る9月末ミノさんを約3週間の予定で村に送り返しました。

壊れた家の修復が緊急に必要なからです。日本への再入国予定日にフィリピンから国際電話が入りました。ミノさんは苦しい胸のうちを率直に話してくれました。「家の応急処置は何とか目処がついた。でも川の氾濫で多くの岩が流れ込んだ畑を元に戻し、そこにとうもろこしなどを作付けしないと次の収穫が失くなる。失くれば一家5人が食えなくなる。だから日本での研修は続けられせん。」

私は他の予定を差し代えて、ガバルドンを訪ねました。そして彼や家族、そして送り出し団体のSAFRUDIやその地域のコミュニティーオーガナイザーのリンダさんやエディさんと膝を交えて話し合いました。その結果研修中止やむなしの判

ミノさんの村で思うこと ~フィリピン

断をせざるを得ませんでした。過去15年の中で初めての経験です。日本で彼の研修のためにご尽力下さった人びと、ガバルドンの人びとと何れも残念な思いを強く持たれています。

私はこの初めてのケースで改めてアジアの貧困の構造を思い知らされています。この村の山の木は70年代終わりに主として日本、韓国、台湾などに輸出されたと聞きました。それ以来、川は氾濫を繰り返す。また畑も大きなダメージを受け続けています。ミノさんの集落へは簡易なつり橋がありましたが流されたまま数年を経ており、村人は腰まで水につかりながら往来しています。加えてミノさんの妻パシタ

さんの心臓病の発病。これらの不幸は偶然に重なったものでなく複合的、構造的悪循環の中で生まれてきているのです。

話題は変わりますが、阪神大震災の被災地神戸でも構造的に同じような問題が生まれてきています。震災3年目を迎えて仮設に残留する世帯は3万6千。約7万人の人びとが苦闘しています。いわゆる孤独死は既に127人。病気で死亡した人を加えると300人を超えました。今被災地では目に見えにくい緊急状態が進行しています。これを克服するのは右にご紹介する第2回市民とNGOの「防災」国際フォーラム（事務局長草地）の'97神戸宣言で触れている「育てる」というキーワードです。

ガバルドンの復興も神戸の復興も自律

第2回市民とNGOの「防災」国際フォーラム '97 神戸宣言

私たちは阪神・淡路大震災から3年目に入った1月17日から3日、神戸市内で第2回「市民とNGOの『防災』国際フォーラム」を開き、『くらし再建 連続ここから』のテーマのもとに多くの被災者、市民、NGOがともに多彩な催しと語りあいの場をもった。神戸、西宮の被災住宅では被災者が創作の喜びを表現した作品を展示し、全国からアートトラックが駆けつけ、東京、東京、川崎、松本、島原、メキシコシティ、中国・雲南など国内外からも多数が参加した。また札幌、山形県鶴岡、宮城県石巻、長野、福岡など全国16地域での支援イベントの開催、そして被災地の仲間が主催する「兵庫アートワーク・イン東京」も連携するなど、第1回フォーラムからさらに連携の輪が広がった。

被災地では連々と連日続く雨に苦しむ、まちづくりでは意見や利害の調整に悩んでいる。フォーラムは被災者を含めた被災者の困難な日常生活からきたテーマの声を千代子の「声のカード」として集約し、現状の分析を出発点にさまざまな課題を徹底的に議論していった。私たちは「おとなも、子ども、人として語りをもつて住まい、くらしと社会」の実現をめざすことと一致した。

くらし再建への道筋は、第一に、もっとも過酷な状況に苦しむ被災者のくらしを公的支援の拡大によって底上げすることである。また、くらし再建はまちの再建、住居の再建、医療・福祉・教育など社会のあらゆるシステムの再建、仕事と産業の再建など、生活を支える基本的要素の再建が、はじめて成り立つものである。こうした道筋をついつつ積み上げていく具体的な計画と実現への手順を求めたい。

二つ目は、住民がまちづくりを担う力を高め、主体的に立ち上がり、自らの意思でまちづくりを進めていくための条件整備をはかることである。行政はそのための環境を整え、住民と真のパートナーシップを築ける新しい枠組みづくりに踏み出すべきである。

三つ目は、私たち自身も意識を改革し、多様で多様な価値観を認め合うよう転換していく必要がある。それは性別を超えた男女協働社会の形成や外国人と文化の違いを認め合うよう多文化共生社会など、生活や社会の様々な面で刷新していくことである。震災直後、私たちが互いに手を差し伸べたい、助け合おうという「震災コートピア」に訴えられてはならない。

私たちはフォーラムの各会場でも語られた発言から「育てる」という言葉に心に残りたい。この1年、私たち市民の中に芽吹いてきた意識の変化を育て、地域を育て、政治と行政を市民が育てることを意味する。震災復興の視点で言えば、望ましくくらしと社会を築いていく復興計画を、市民自身の手でつくることである。

こうした行動は、くらしの中から新しい市民社会をついていくことにつながり、その成果は大きく花開くであろう。

私たちはフォーラムを通して、くらし再建を具体化するために「1000の発言」をまとめた。この発言を柱として、ここに「市民のつくる復興計画」を策定していく。ここでは、被災地の復興を通して得た学びを、くらしとまちの発展に活かしていく。

13年前に大地震に見舞われ、いまだに復興努力を続けているメキシコからの参加者は「50年最大の難関」というキーワードを私たちに残してくれた。つらい記憶は忘れたいが、大きな現実を忘れない。忘れさせないために内外には骨太の復興を促す。ネットワークを広げていかなければならない。被災地神戸で私たちが語りあっていた言葉と前年の実績が、21世紀の日本と世界を切り開く糧となるに違いない。

世界が見つめている被災地神戸の復興を私たちが担っていく責務がここにある。

1997年1月19日

した市民が育つことによって実現されていくと考えています。

総主宰 草地 賢一

2世代目に入った研修生 ~第13回タイ・スタディーツアーを通して

研修生を日本に迎えはじめて15年が経ちました。これまでに10の国の地域から人を選んできました。どこから選ぶかは研修事業の大事な点ですが、ここ1~2年は次々と対象地を拡げるのではなく、これまでに人を迎えてきたところとの関係をより深めていくことに重点をおいています。86年以降新しい研修生を招くことがなかったネパールに対し、第1期生バラト・ピスタさん（82年）の作った組織から95年にビショさん、96年にピドゥルさんを招きました。今年は前号ネパール報告でも触れておられるように第2期生ラ

ダ・バンストーラさん（83年）のグループから次世代を担う人材としてサビトリさんを迎えます。またパプア・ニューギニアからもヘルペさん、レルさんたち（90年）の推薦により5年ぶりに1年間滞在の正規研修生を2人迎



サウエーさん（右奥）、プリチャーさん（左奥）に手伝ってもらい候補者から話を聞く。

この地域の選定については、これまで迎えた研修生が帰国後どのように村づくりに取り組んでいるか、その成果はどうか、周囲の支援体制はどうであるか等を調べ、比較し、それに

よってより一層の支援が必要で、また続く研修生の招へいが効果的と判断される地域の優先順位をつけていきました。これによって、先のピスタさんの組織、ラダさんのグループ、パプア・ニューギニアからの選考を行ってきました。これらに続く地域として挙げられたのが北タイのカレンの人々の村です。ここはこれまでにTKBC（タイ・カレン・パプテスト会議）を推薦団体としてプリチャーさん（85年）、コマさん（87年）、ウィラトさん、ベリアさん（86年）に加え短期研修生としてベリポーさん（91年）、推薦団体は異なりますがTKBCともつながるチャラムサクさん（93年）などを招いてきています。現在は手織布の支援を通じ、また毎年暮れにスタディーツアーで訪ねているところです。中でもプリチャーさんは帰国後、ムシキー村の学校の教員として、生徒に農業を教えるだけでなく、村人との野菜づくり、布のグループの支援を根気よく続けてきました。前号草地報告にあるように96年夏にその教員を辞し、生まれ故郷に近いメーソン県メラノイに移りました。この地域においても、これまでと同様、山の人たちによる生活改善を働きかけるプリチャーさんをPHDから支援をしようということにしました。

この方針に従ってこの12月のタイスタディーツアーは人選と布の買い付けを含んで行いました。今年はこの人選があったため例年とは行程が変わり、東北タイへは行くことができませんでしたが、ワラヤさん（88年）とサウエーさん（91年）がカラシン県の村から合流し、元気な姿



イチゴ畑を案内するチャラムサクさん（左）とワラヤさん（中央）。

を見せてくれました。人選についてはメーソリアン市に近いドーイ村でサウエーさんの通訳によって、面接を行いました。候補者は若い農業者のクルワン・アンボンさんとプラチャック・ムアンチャンさん。1日かけた面接と家庭訪問の結果、97年度はアンボ



ンさんに決定しました。

道中、パヤップ大学開発調査研究所で働くチャラムサクさんの案内でボッケオ村の無農薬のイチゴ栽培を見学、またコマさんからはボッケオ村で展開する村人のグループによる活動や最近始めたラオスへの農業指導の話の話を聞きました。ムシキー村では主に布の活動を通じて村人と交流しました。（詳しくは本号ソディ通信今出レポートを。）プリチャーさんは、メラノイで私たちを迎えてくれ、人選の段取りと91年にゲストとして日本に招いたクルポーさん、パワローさんの村などへの滞在を用意してくれました。

アンボンさんの招へいが新しい地域の村づくりを促進する力となることを期待します。

藤野 達也

ツアー参加者のほぼ全員から報告文が届いています。全文掲載の報告集はこれから編集されますが、ここでは2人の方のものを抜粋で紹介いたします。

女性が変れば村が変わる

加納卓也（姫路市・農業改良普及員）

ムシキー村で布のグループの女性と交流しました。草木染の実演や夜の会合で村の女性がいきいきしている姿は、農閑期の労力の有効活用だけではなく、まわりにも好影響を与えているように思われます。それぞれが自分の能力を活用できる場面があり、家族内においても男性も家事や育児に協力的に参加し、電気はまだきていない村だけど生活にゆとりが感じられました。

日本の農村では事業化、女性の有職化が進み、物資面では都市生活者と格差はなくなっています。しかし農家らしい豊かさ一時的ゆとり、自給野菜、手作り、人間関係等一が少なくなり、家族ぐるみの営農意欲は減退しています。そこで農家の良さを残しつつ、ゆとりある農家生活にむけて新しいライフスタイルの確立や女性の起業家などが望まれています。この村の女性の取組のように伝統技術の見直しや女性能力の活用で成功している事例は参考になりました。

旅から一か月 小林真理（長野市・会社員） 旅の余韻に浸る間も、整理をする間も



ムシキーの布のグループが最近作った布の展示。保管小屋。ベリポーさんの家の前にある。

殆んどないまま、それがどんどん過去のものになっていくのは悲しいことだけれど、これが私の現実。カレンの人々の笑顔も、あの星空も暖かい焚き火も素朴な生活も、決して私の感傷的な思いの為にあるのではなく、それが彼らの懸命な日常であり現実なのである。旅の間中ずっと頭の中をよぎっていたのは、そういう「日常」という言葉だった。バナナの樹が立っていることを除けば、どこか日本の田舎のような風景の中でボーッとしながら、また満天の星の下、それに向かって立ち上る焚き火の煙をボンヤリ眺めながら、特別なことなど何ひとつないけれど、静かな幸せを、本当にゆとりと感じた。旅立つ前、「ボランティア」という言葉を前に、一体自分は何をすべきなのか、何ができるのかと勢い込んでいたけれど、無力な私が大それたことを考えるよりもまず、自分の日常をどう生きるのかが、今は大切なことだと思った。

日程：96年12月23日～97年1月2日
行程：大阪～チェンマイ～ボッケオ村～ムシキー村～チェンマイ～ホイカイパー村、トゥンパーカー村、パーマー村、ドーイ村～チェンマイ～大阪
参加者：13人

14 期 生

研 修 生 レ ポ ー ト

帰国研修生短書

ウピさん (インドネシア)
丸山悦司氏・陽子氏(加古川市)～岩下富子氏、谷田治氏、田辺美起枝氏、外岡茂子氏、篠山町保健センター、篠山町デイサービスセンター、ささやま保育園(兵庫・篠山町)～東日本研修旅行～山崎町保健センター、月輪定弘氏、村上ノリ氏、児林元子氏、前川裕文氏、前田生子氏(兵庫・山崎町、安富町、新宮町、姫路市)～西日本研修旅行～赤穂中央病院、赤穂ライオンズクラブ(赤穂市)～淡路島モンキーセンター(洲本市)～釜崎キリスト教協会(大阪・西成区)～本野一郎氏/神戸市西農業協同組合(神戸市西区)～兵庫県内研修旅行～フィリピン比較研修旅行(ヌエバエシーハ州)～帰国

ビドゥルさん (ネパール)
東日本研修旅行～山口勝弘氏(兵庫・南淡町)～西日本研修旅行～淡路島モンキーセンター(洲本市)～釜崎キリスト教協会(大阪・西成区)～本野一郎氏/神戸市西農業協同組合(神戸市西区)～兵庫県内研修旅行～保田茂氏/神戸大学農学部(神戸市灘区)～フィリピン比較研修旅行(ヌエバエシーハ州)～帰国

カインさん (ビルマ)
兵庫県三木保健所、三木市健康課、芝美代子氏、阿南徹氏(三木市)～東日本研修旅行～尾崎食品株式会社(神戸市西区)～西日本研修旅行～ハワイ地球人くらぶ、堀内幸子氏、福嶋慶純氏、鳥取県根雨保健所、笹間典政氏、加藤美津子氏(鳥取・羽合町、倉吉市、日野町)～勝部弘和氏(岡山・新庄村)～フィリピン比較研修旅行(ヌエバエシーハ州)～研修継続

東日本研修旅行
和歌山県海友会(和歌山)～愛農学園高校(三重)～豊田市国際交流協会(愛知)～全日本自動車産業労働組合総連合会(東京)～まぶね教会～PHD鎌倉交流会(神奈川)～甲府教会、山梨英和女学院中・高校(山梨)～塩尻めぐみ幼稚園、松本教会(長野)～国際ソロプチミストかかみ野、中濃教会、PHDひだ友の会、新宮小学校(岐阜)～湊小学校、ラブリー農場、美浜原発、美浜北小学校(福井)～松原高校(大阪)



広島平和公園では久保浦さんから戦争と平和について学びました。



相思社の弘津さんから水保の現状の説明を聞く。

西日本研修旅行
出水の農業を考える会(鹿児島)～水俣病センター相思社(熊本)～下郷農業協同組合(大

分)、庄内町生活体験学校、アジアを考える会・北九州、東八幡教会、北九州YMCA、祝町小学校、西南女学院短期大学、北九州市消費者団体連絡会(福岡)～アジアに学ぶ会、梅光女学院高校(山口)～瑞穂アジア塾、キリスト教愛真高校(島根)～桑本塾、三良坂町、日影館高校、アジアに学ぶ会、平和学習・高陽東高校(広島)～ちろりん農園、丹原町国際交流協会、丹原西中学校、新居浜西高校(愛媛)～三野町国際交流協会、吉津小学校、四国学院大学、香川県ボランティア協会、高松市国際交流協会、カナン保育園(香川)

14期生3名は、おかげさまで各地で多くの方々への暖かいご指導を受けながら、充実した研修に取り組みできました。現在、ウピさんとビドゥルさんは帰国を前にレポート作成に励んでいます。
西日本研修旅行では今回新しく四国を訪ねたため、度々お世話になってきた松江市、鳥取市、岡山市などには残念ながら何うことができませんでした。次の機会にお目にかかりたく思います。
今回は、ビドゥルさんが東/西日本研修旅行での経験を語ります。

海外ゲスト

95年秋に招いたレックスバンドに続いて、96年はパプア・ニューギニアからソルー・アンソニー・スパムさんを11月に迎えました。ソルーさんは大学の先生であり人気バンドのリーダーでもある才人です。一週間の滞在中、神戸、奈良、大阪で交流の会をもちました。西洋文化が急速に入りつつある自国の例をもとに、伝統と現代性、地域性と国際性のバランスについて話をしてくれました。持参したたくさんの楽器の演奏も印象的でした。



震災被災地の見学の後、神戸市長田区にあるFMわいわいの生番組に出演。西城遊児さん(左)のインタビューを受けるソルーさん(右)、中央はビジョン通訳の小林重己さん。

おげきです。ビルマにはいま
ふゆになってもこしはあたたかです。あまり
さむくないです。ははが来てくれます。
win ah は こしで Rangon へ いったり いろいろ
します。こしをいそがしい人です。
Tun Tun ah は がら がら こしに いて がら いて
います。Tun Tun ah も のが よじ の こし と がら がら
こいれ、がら の たんぽうは ぶら の ちんぽう は
よい たんぽうです。おたは ぶら の ほういん に すごう
やっています。
こしをさしたちも さきの よじ けんきょ したり、おたは
は がら がら います。
あつちのの グループは おいれ の 人 4-びんて
すすけて やっています。こしは、ぼうしを かくて うりまわ
して、おらのおんがら こしへ のくのは おいれ
がら がら います。おたの たの たの たの たの、おしこ
20 にんが、いまも おたのおしこを あつちのこ
も やっています。けんきょのうらに、がらがら が まてのおん
に おいれ しています。
ムム
ハ

(93年度11期生・ビルマ)

15期生紹介

クルワン・アンボン
(25才、男性)
タイ ーメーソンン県メラノイ
研修内容：農業、淡水業養殖
85年研修生ブリチャーさん推薦の若者。農業のかたわら、山奥の子どもが町の学校へ通うための寮の運営を手伝っています。最近街道沿いのにひとり暮らし。



ソミ・ワニ
(36才、男性)
パプア・ニューギニア
モロベ州フィンチャーフェン
研修内容：農業
90年研修生ヘルペさん推薦。この地で活動する団体LDSの実施する農業コースの終了生。307人の山奥の村ベディングに妻と子ども2人と住んでいます。



ゲオバ・ハリエオ
(38才、男性)
パプア・ニューギニア
モロベ州フィンチャーフェン
研修内容：農業
同じくヘルペさん推薦、LDSのコースの終了生。300人の村ビランゴで鶏、豚を飼い野菜をつくっています。妻、一人娘と兄弟2人で住んでいます。



サビトリ・シュレスタ
(28才、女性)
ネパール ポカラ
研修内容：
保健衛生、編み物
83年研修生ラグ・バンストーラさんの編み物グループのメンバーとして活躍しています。2人の弟と母親と暮らしています。



けんきょのうらに、いまも おたのおしこを あつちのこ
も やっています。けんきょのうらに、がらがら が まてのおん
に おいれ しています。
ムム
ハ

けんきょのうらに、いまも おたのおしこを あつちのこ
も やっています。けんきょのうらに、がらがら が まてのおん
に おいれ しています。
ムム
ハ

けんきょのうらに、いまも おたのおしこを あつちのこ
も やっています。けんきょのうらに、がらがら が まてのおん
に おいれ しています。
ムム
ハ

ビルマ
ビドゥル
(東日)



「恐るべし、メサリアン」

「村のグループへ手紙を出したんだけど返事がないからちょっと見てきて。」ソディの優しいお姉様たちの命により、僕は遙かタイへ飛ばされることになりました。タイスタディツアーの一参加者の僕にはこんなウラがあったのです。てなわけで今回はムシキの村での会合の結果を中心にメサリアンの様子も含めて簡単にご報告します。

ソディからの宿題は、1)布のサンプル表の作成、2)ソディ側が英語・タイ語でのやりとりが可能なこと、3)化学染料を使ったものの扱い、4)グループ活動上の問題点、5)布のデザインの5項目でした。

会合の前にグループのリーダーたちと話をしながらサンプルはもらうことができ、やりとりについては「ありがとう」と感謝され、デザインは日本から持参した写真(難しい織柄)を見せたところ「こういうのは手間がかかるが、希望があるなら出来ます」との返事をもらえたので幾つかは解決。

会合では3)と4)について意見交換をしました。まず3)について、リーダーであるラッセさん(91年短期研修生ベリポーさんから交代)から、一部に化学染料を使っていたことのお詫びとその理由について説明がありました。まずメンバーの

中に「日本向けは天然の染料だけで」という趣旨の不徹底があったこと、染料となる木や草が少なくなっていること、天然のものでは季節、天候でばらつきが出るため一定した色を出すために使っていたこと。しかし「日本の皆さんが望むなら草木染にします。実は便利だけど化学染料だと皮膚にアレルギーが出るのであまり使いたくない」とのこと。今回買付けた布は、かばん以外は草木染とのことです。

グループの問題として、運転資金が足りないこと、販路が少ないことを挙げていました。また前号でお伝えした、プリチャーさんがムシキ村から移ったことについては、「大丈夫です」と言われ、今後のスムーズな交流のためメンバーの誰かに日本語研修が実現すればとの話まで出ました。

一方、メサリアンではプリチャーさんや村の女性たちと会うことができ、ここからも布を買いました。こちらも販路開拓の問題を抱えていますが、こちらの布は少ししやれた感じで、ムシキの布とは違う良さがありました。

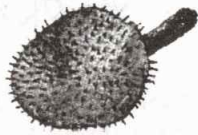
ムシキから始まった交流がメサリアンにもだんだんと広がってきて、布のバリエーションと僕たちの視野も広がりました。買い付け量に限りはありますが、彼らの熱意や努力を考えると双方の村とつながっていききたいと思えます。バザー等を通じてさらに多くの人に知っていただきたい、買って支えてもらいたいと思えます。

今出 敏彦 (神戸市 会社員)

〇月×日のPHD協会

職員 小松 九州からの客が帰り際に「PHDは美人揃いですね～」と一言。大きく頷きその日はゴキゲン。事務所の平安のためミエミエでもお世辞大歓迎。

職員 草地 義理チョコの慣例がない事務所で、複数のチョコをゲット!他の職員にもおすそわけが。余裕?虫歯?減量中?と様々な推測が生まれ、大賑わい。



職員 谷 西日本研修旅行を目前に大カゼをひく。道中ワンボックスカーで一緒に移動するからやむなしとはいえ、職員、研修生に伝染、大騒動。

職員 吉岡 東日本研修旅行の移動時、運転交替の際、路上に財布を落とす。日頃の行いが良かったのか、現金はなかったものの、カード等は戻り、大感激。

職員 藤野 各地から届く使用済テレカの整理と勘定に妙にご熱心。と見るとキレイなねーちゃんモノをいそいそ収集。机の前に貼っての気分転換に大満足。

職員 渡辺 仕事後はダックスフントの愛犬ビスの世話に献身。寝床に散歩に食事にと気を遣いつつ、高級ドッグフードを前に世界の食糧配分について大思案。

(文句の多いもん順) ……こんなん書くとまた文句言われそう。

約100万円の増となりました。皆さまのご協力に厚くお礼申し上げます。

本年度(96年度)の会費が未納の方は、よろしくお願いたします。

〈ご支援に感謝申し上げます〉

NGOの組織運営も支援するというユニークな活動を行っているアユス=仏教国際協力ネットワーク(茂田真澄理事長)。97年NGO人材助成事業に17団体の申請の中から当協会も選ばれ、人件費の支援をいただくことになりました。一方的に支援を受けるだけでなくセミナーをはじめ、いくつかの協力事業を行っていきます。4月17・18日には宇治市、黄檗山萬福寺に

おいて「環境・いのち・未来」と題した合宿があり、当会職員も参加します。申込み、問い合わせは事務局03-3820-5831まで。

また支部のアユス関西では下記のベトナム・カンボジアスタディツアー参加者を募集中。
・ハノイ近郊キンバン県、アンコールワット等。
・5/20~27 6泊8日 ・参加費 約29万円
詳しくは06-771-7641(中村さん)まで。

〈理事に神木氏が就任しました〉

2月20日開催の第37回理事会において神木董氏((株)神木代表取締役)が当協会理事に就任しました。

PHDは、アジア草の根の人々の生活向上のために、有意義な活動をしていると思います。何かお役に立てたらと思い、今回初めてこのLETTERの編集をさせていただきました。少しでも多くの皆様に読んでいただき、PHDのことをもっと知っていただけたらと思います。

藤原暁子

編集メンバー

奥西真幸 鬼塚ふみ子 辻村絵 中山理映子 藤井晃子 藤原暁子 古本妃留美 松尾和彦

PHD NEWS

〈会費・ご寄附寄託状況〉

1996年 11月	93件	2,981,666円
12月	751件	7,384,298円
1997年 1月	275件	3,621,231円
合計	1,119件	13,987,195円

前号で年末募金のお願いを致しましたが、以上の通り多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。12月と1月だけで見ますと寄附金収入だけで917万円と、昨年の同時期に比べ、



編集後記

私がPHDに出会ったのは去年の秋です。私が通う大学の「ボランティア論」という講義に、話しに来られた草地さんとの出会いがきっかけでした。私は中学生の頃から社会福祉とかボランティアというものに興味を持つ

ていました。しかし、私が考えていたそれは、スケールの小さなものでした。しかも、たいして実行に移していませんでした。「お話を聞いているうちに、自分は口先できれいごとを言っているだけの人間ではないかと恥ずかしくなりました」と書いた感想を読んだ草地さんが、PHDの事務所に私を招いて下さり、数時間お話できました。私はただの学生で、今大きな力はありません。でも、今後学んでいく中で、社会に何かを与えることができるようになりたいと思いました。

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。